

Q20 辺野古・大浦湾の5,800種以上の生物のうち、約1,300種は分類されていない生物であり、その多くは新種の可能性があるというのは本当ですか。

A 本当です。約1,300種のうち、種が同定されると多くは新種の可能性があります。

平成28年6月には、2006年からの10年間で、エビやカニ、ハゼなどの新種計26種が相次いで発見されていることが報道され、同年7月には、100年以上ぶりにダルマスナギンチャク属の新種が発見されたことが報道されており、貴重な生物の存在が次々と明らかになっています。今後、更に新種などの貴重な生物が確認される可能性も十分にあります。

国はそれらを学術的に調査することなく、またそれらを保護する一切の措置を施すことなく工事を行おうとしています。

膨大な新種生物群が絶滅する危機に瀕し、貴重な生物資源が地球上から永遠に失われようとしているのです。



琉球新報 (平成28年6月19日掲載)

辺野古の埋蔵文化財

辺野古新基地建設の工事区域とその周辺区域には、名護市教育委員会の調査で思原(うむいばる)遺跡、大又(うふまた)遺跡などの埋蔵文化財があることが分かっています。

平成28年7月には辺野古崎先端部分の陸域・海域を含む約37,600㎡を長崎兼久(ながさきかねく)遺物散布地という新たな埋蔵文化財包蔵地として県教育委員会が決定しています。

また、キャンプ・シュワブ内の各遺跡からは、弥生時代から平安時代にかけての土器、近世以降の陶磁器や碇石(いかりいし)といった遺物も発見されています。

これらの埋蔵文化財は沖縄の先人たちが残してきた財産であると同時に、地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると言えます。



ヒメダルマ スナギンチャク

大浦、金武湾で新種発見
鹿児島大学国際島嶼教育研究センター専任講師の藤井琢磨(とうい たくま)と琉球大学理工学研究所のシエイムス・テイビス・ニフマイ准教授が、沖縄本島東海岸の大浦湾と金武湾で、ダルマスナギンチャク属の新種「ヒメダルマスナギンチャク」を発見し、調査報告は21日発行の国際学術誌「ZooKeys」に掲載された。藤井特任准教授による「ヒメダルマスナギンチャク属の新種」は100年以上ぶりに見つかった。調査報告は21日発行の国際学術誌「ZooKeys」に掲載された。藤井特任准教授による「ヒメダルマスナギンチャク属の新種」は100年以上ぶりに見つかった。



ヒメダルマ スナギンチャク

今回発見されたヒメダルマスナギンチャクは現在、大浦湾と金武湾のみで生息が確認されている。ヒメダルマスナギンチャクは流れが緩やかな内湾の砂泥底で生息している。ダルマスナギンチャク属の中で最も小さい体を持つ、体長は1.5〜2.4cm。足の部分が細く伸びるのが特徴。軟らかく不安定な砂泥底で流れのないように、足がいかりするような役割をしていると考えられる。砂泥底に生息する生物の多くは砂粒の大きさや水質などが細かく異なる「微環境」を好んで生息している。ダルマスナギンチャク属の多くは、調査は2009〜14年に行われた。

琉球新報 (平成28年7月23日掲載)